

月刊

いじろのとも

第十一卷

十一月号

脳も眼も二つある

人間だけが

働きの異なる

二つの脳をもっている

一つは自分を思う脳

一つはひとを思う脳

それに対応する

かのように

眼（まなこ）も二つ

一つは自分を見る眼

一つはひとを見る眼

空しい道徳教育

道徳を

教える方法

変えようと

心のつながり

つくり出さねば

人生を考え直して

みたい人は（八二）

『正法眼蔵』解説（二二六）

有時の巻を続けます。

おほよそ羅籠（らろう）とどまらず有時現成なり。いま右界に現成し、左方に現成する天王天衆、いまもわが尽力（じんりき）する有時なり。その余外（よげ）にある水陸の衆有時、これわがいま尽力して現成するなり。冥陽に有時なる諸類諸頭、みなわが尽力現成なり、尽力経歴なり。わがいま尽力経歴にあらざれば、一法一物も現成することなし、経歴することなしと参学すべし。

例によつて、参考までに玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）の現代語訳を引用させて頂きま

す。とてもおさえこむことはできずに、有時は実現している。いま、あちらに現れ、こちらに現れている天界の住人たちも、まさしくいま、わが尽力してい

る有時なのである。そのほか水陸にいるさまざまなる衆生の有時も、いまわが尽力して実現しているのである。あるいはまた、隠れたり現れたりしているあの世、この世のもるもるの衆生の有時も、ことごとくわが尽力して実現しており、尽力して経めぐっている。いまわが尽力して経めぐっているのだから、一事一物も、有時として実現することはなく、経めぐることはないと思ふべきである。

この部分は、とても難しいようです。参考までに読んでいます解説書が、それぞれ、かなり違った解釈をしています。確かに、表現が曖昧で、明確とはお世辞にも言えない文章だと思えます。時間のことがはっきり分かっていないと、解釈できないのではないのでしょうか。以下、私が理解したところを、解説していきます。

まず「おほよそ羅籠（らろう）とどまらず有時現成なり」ですが、この「おほよそ羅籠とどまらず」でさえ、人によつて解釈が異なっています。前出の訳のように解釈している人と、「一切万物の総称」だとする解釈もあります。また、その後に出てきます「有時現成なり」も、前出の訳のように「有時が実現している」と訳すものが多いようです。

実は、この真意をとることが、今回の部分の解釈上、

決定的に重要だと思うのです。またこの短い部分には、「有時」四回、「現成」六回、「経歴」三回と、それぞれ頻繁に出ていますが、この意味が相互にどう違うのが区別できるかどうか、解釈上とても大切なように思えます。

そうですね、まず、「現成」を右のように、ただ、「実現」と訳すだけで、果してよいのかどうか、元に戻って、検討してみたいと思います。

実は、この現成は、既に詳しく検討しています。それは、この『正法眼蔵』の「現成公案の巻」の解説の第一回目です。第九巻十月号をお持ちの方は、面倒でしょうが、取り出してもう一度ご覧頂けたらと思います。

結論だけを簡単に申しますと、現成の「成」ですが、それは、いつまでも生きていたいという思い（有）と、そうした思いとは独立に、自分自身に宿した、私たちを老や病や死へと誘う働き（無）との弁証法的運動として、私たちは毎日「成」りながら生きています。それが「成」なのだ、ということですね。

では、成の前に付く「現」は何なのでしょう。それは、実は時間論を検討するときの宿題となっていました。第九巻十月号の最後の段落に書いています。お確かめ下さい。

さて、「現」ですが、これまでの「有時の巻」の解説でお分かりでしょうが、この「現」は、まさに時間としての現在で、過去と未来の弁証的運動とその統合としての今なのです。ですから、それは「有時」そのことであると言えます。「成」には、明言的に時間としての意味はありませんが、「現」がつくことで時間の意味合いが表に現れてきます。ただ、それは弁証法的運動とその統合の「結果」面を強調するものである、ということですね。また、道元の言う「現成公案」は、空海では、「即身成仏」に当たっていました。ですから、公案はなくて現成だけでも、人間の時間的な弁証法的運動とその統合を表していると言えます。公案がつけばより明言的にその統合結果に限定されるのだと思うのです。

もう少し、時間を理解するために考察して行きます。時間に、三つの区別があることは、何度か述べてきました。一つは、誰でもが知っている物理的な時間の流れです。あと二つは、人間だけがもつ時間で、一つは普通の人たちが感じる、過去と未来の間（はざま）をアンビブレント（両面価値的・矛盾的）に運動しながら、生きていく時間です。もう一つは、完全なその統合としての時間です。換言すれば、前者は「人（凡夫）の時間」であり、そして、後者は「仏（聖者）の時間」で、それ

は、時間とは言っていますが、時間を超えた時間、つまり、「永遠」なのです。

さて、話を元に戻して、では、「有時」とは上のどの時間なのかですが、おそらく人間のもつ時間、つまり凡夫の時間と聖者の時間の両方を指していると思います。私たちは、時間と言えば、すぐ物理的時間に思いが行きますので、それを常に戒めなければなりません。さらに、私たちが目指さなければならぬのは、勿論、聖者の時間です。そして、そう思って道元を読まないという理解できないところがいっぱいあります。殆どがそうだと思います。

次に、「現成」ですが、これは、前述のように、時間を経て現に成っている結果を示すものでした。

次に、「経歴」ですが、これは、最近（三号前）の八月号で解説したばかりです。結論的に言いますと、それは時間が弁証法的に「運動」する面を強調して言っている言葉でした。私たちの心の中を、いろいろな経験とあしたへの思いとが、かけめぐる事です。

また、「尽力」という言葉が何度（五回）も出てきますが、これは、私たちが修行・精進に「力を尽くす」とことです。

退屈ですが、もう少し言葉の意味を見ておきます。ま

ず、「羅籠（らろう）」ですが、これは、鳥を取るあみ、鳥を入れておくかご、のことです。「天王天衆」は、天界の王や神々のことです。「冥陽」は、冥界と陽界、つまり、目に見えない世界と目に見える世界の事です。他は、現代語訳をご参照下さい。

さて、この文を読みますと、私は、密教の曼陀羅（まんだら）に思いが行きます。曼陀羅は、密教の世界観を表すものですが、この文章も、道元の世界観を表しているのだと言えます。

仏教では、この世、あの世のあらゆる存在は、すべて私たちの心が作り出したものである、と考えます。こう言いますと、多くの方は、そこに物が存在していて、それを分析して科学が成り立っているのに、それを私たちの心が作り出したものなどと、なんということをとあきらめられるのかもしれませんが、そうではありません。では、こう考えたらいかがでしょうか。そうした全ての物に意味を与えているのは、私たち人間の心なのだ、と。私たちの心にとって意味のないものは、存在しないものと言える、というわけです。それは、逆に言いますと、こころが、存在を作りだしていると言えるのです。そして、難儀なことに、そうした存在も、人間の心も、相対なもの宿命として、相互に依存してしか存在しえない

ということですが。そうしますと、あらゆるものが、相対なものに依存して存在しているわけですから、普遍的なものには無く、常にうつろうことになってしまいます。人々の行動を導く価値の基準が変動きわまりない、虚ろなものになってしまいます（現在そうなっています）。

実は、その普遍的な価値基準を示すものが、四聖の教えなのです。その教えは、何度も何度も繰り返していますように、私たちの随（無意識）に宿す如来さまと一体になる体験から生まれるものなのです。そうした時、私たちは心に絶対な基準を作りだすことができるのです。そして、その心が作りだしたものが、曼陀羅世界なのです。

道元がここで述べていますのも、そうした世界だと言えます。それは、釈尊の教えを信じ仰ぎ、その教えに則って修行・精進するとき、初めて実現される世界なのです。それが、尽力ということばに現れています。そうした世界を表すために、有時や現成や経歴といった言葉が頻出するのです。ここに出てきます「天王天衆」「余外にある水陸の衆有時」「冥陽に有時なる諸類諸頭」「一法一物」など、すべてのものが曼陀羅を構成するメンバーなのです。

何度も何度も、道元の文章とこの解説をお読み頂けましたら、きっとご理解頂けるのではないでしょうか。

自作詩短歌等選

空虚でばらばらな家庭

立派な家だけれど

昼間は誰もいない家

みんな

朝

ばらばらに起きて

ばらばらに食事し

ばらばらに出掛ける

昼

出先で

ばらばらな食事をして

夕方

ばらばらに帰って来て

ばらばらに買った食品を

ばらばらに食べ

そして

夜

ばらばらに寝る

友達のような教師

教師も

他己を弱め

自分を見失って

生徒の気に入られる

ことばかりを

気にしている

情けないことよ

友達のような教師よ

奉仕活動の義務化

奉仕活動は
させていただいて
ありがたい
と思つてするもの

したくない
と思つてしても
人格向上には
なんの役にも立たない

他者への無関心

気にしない
気にしない
ひとのことなど
気にしない

認識の誤り

日本の少年犯罪は
欧米に比べて
深刻さが軽い
と社説は述べる

日本のマスコミの
認識の甘さ不確かさよ
木を見て
森の見えない人たちよ
日本の社会を
誤り導くな

物や命への還元

現代人は
自分を物質や生命に
還元したがる
なのに
仏や神には
還元したがない

やさしさの病理

いま
やさしさが
おかしいという
やさしさの語源は
恥ずかしさ
ということだと
言語学者は言う

でも

いま恥ずかしさは
病理とされて
治療・克服の対象と
なっている
そして
やさしさは
自分が与えないのに
与えてもらうもの
となっている

やさしさは
人の心を感じるころ
やさしさの根本は
自己を否定するもの
死・終末・滅亡・如来
やさしさは
他己

エゴのぶつかり合い

毎日新聞の社説は言う

社会は基本的に

エゴイズムの

ぶつかり合いだと

まさに

自己社会の典型である

現在の民主主義社会では

そうなっている

でも

かつて

他己社会の存在した

日本では

そうではなかったことに

気付いてほしい

犯罪を思い止まらせる

他者に無関心な

民主主義社会

愛情を欠く国民

権威を失ったおとな

権利ばかりで

義務のない憲法

刑罰の軽い

刑罰をしない

少年法

子どものどこに

犯罪を

思い止まらせるものが

あるの

自作随筆選

家庭は教育の場ではない?!

毎日新聞の香川県版に「相談室の子どもたち 四国・心のケアの現場から」という欄があります。毎週土曜日に連載されますが、現在は、香川大学保健管理センター所長・教授で臨床心理士の方が執筆されています。毎回、臨床家の方は、多くの人がこんな風に思っているのだと、なかば呆れて読んでいるのですが、先日、次のような見出しがあり、遂に、一言、書かざるを得ない気分になりました。

その見出しとは、「家庭は教育の場ではない」『居間を「何もしない場」に』『充実した無為は心の栄養』、というものです。

本文は、記述に論旨が一貫しない点や、考え様では、教育とは何かがよくお分かりではない、といった点があるのですが、次のような記述は、この方の考え方がよく現れているように思えますので、引用させて頂きます。

社会の変化によって、・・今新たな家庭の役割が模索されているのです。しかし、いまだにその答え

は見つかっておらず、困難な課題なのです。解答の一つとして「家庭を教育の場に」「しつけの場に」という安易な意見が出されていると考えられます。

.....

「充実した無為」は、何も生み出さないように見えて、心の栄養を補給しているのです。これから子どもたちが迎える「豊かな時代」は、絶えざる判断や選択に膨大なエネルギーを必要とする時代です。「充実した無為」という新しいぜいたくな時間の過ごし方こそ、豊かな時代を生きる力を育むのです。

実は、以上のような、「精神的に不健康な人たち」に接している人の書いた文章を読む度に、いつも思うことがあるのです。それは、自分では治療している積もりが、そうした精神的不健康者から自分も逆に限定を受けているということ（これは、人間という相対な者の避けられない宿命）。もっとあからさまに言いますと、自分も精神的に不健康になって行きやすい、ということなのです。でも、おそろしいことですが、まさに相対な者の宿命として、そのことに気付けないということです。

この方も、そうなっているとしか思えません。前半の家庭の役割に混乱がある、という指摘は正しいと思えます。でも、その解決法が見つかっていないとか、「家庭

を教育の場に」「しつけの場に」という解答が安易なものだと思ふ、といったことは、精神の健康を欠いているからだとは、私には思えません。

私に言わせれば、解決法は、とおの昔に見つかったりしますし、家庭を教育やしつけの場にするのは当たり前のことなのです。

多くの人は、社会の変化について行くことがよいことのように思っています。これも大きな間違いです。悪い社会は善い社会に変えていくことが、人間には常に求められているのです。でも、相対なものしか見えない民主主義の世の人たちは、何が善いことなのかすら分からなくなってしまうています。ですから、どう社会を変革すればよいのか、といった目指すべき善い（価値の）方向すら分からないのです。みんなが、道に迷い、自分を見失って、無明の闇の中をさまよっているのです。

私は、現在のように家庭の役割が分散してしまった今でも、一つの役割だけは残されている、あるいは、残さなければならない、と思っているのです。それは、家庭こそが、互いに「人間らしい人間になる根源的な場」だというものです。

では、「人間らしい人間」とは何かですが、私はそれを一口で言って、「人の心を感じるころ」を持つ、と

ということだと言っています。

では、人の心を感じる「こころ」を持てるようになるには、どうすればよいのでしょうか。これが極めて大切なのですが、でも、極めて困難なことでもあります。それは、お互いが愛情を持ち合うということだからです。

なかなか分かって頂けないのですが、それは、信仰を持つということなのです。意識の領域では、誰かを信じることが、愛情の証なのです。そうなるためには、誰からも愛情を受けなければなりません。人間は赤ん坊として誕生し、成長していきます。ですから、まず、人間が愛情をもつようになるためには、親（養育者）から、愛情を受けて育たなければなりません。でも、いま、信仰が失われて、お互いに愛情をかけない悪循環が起っています。親は、一見、子どもの世話をやいているようですが、多くは、自分の野望やエゴを満たしたり、ペットを可愛がるように「慰めもの」としてに過ぎません。ですから、この悪循環を断ち切るには、親の教育と同時に、学校教師の再教育が大切になります。そうして、親や教師を愛情をもつ人間、あるいは、少なくとも愛情が大切であると考え、愛情をかけようと努力する人間に作りなおすことで、はじめて子どもたちが愛情を受けて育つようにすることができるようになります。でも、これこ

そ、なかなか難しい課題と言えます。現在の状況では、法律で強制し、応じないものには、重い処罰を課す以外には方法はないと思います。でも、本来は、信仰や愛情は、そうしたことに最もなじまないことです。

実は、親が赤ん坊の心に自分のこころを全開して接していれば、「人の心を感じるこころ」を自然に養うことができるのです。でも、いま母性が失われ、母親がそうしなくなってきました。ですから、母親自身も人間性を高めることができているのです。父親についても、大同小異です。家庭内で、自分のこころを謙虚に開いて、コミュニケーションしようとしていません。みんなが、こころを開いて、子どもに接していれば、自然に、子どもしつてもできますし、勉強しろと言わなくても、適性のあることを、勝手にするようになるのです。

最後に、「充実した無為」ですが、子どもには、そんなものは不必要です。子どもは、常に「何かを為している」ものなのです。愛情をかけられ、自由にさせてもらっている時、心の底から、成就の喜びを感じるのです。それが、何事かを「成し遂げよう」とするエネルギーになっていくのです。愛情も自由も与えられず、冷酷に管理・統制ばかり受けている現代の「病的な子ども」としてのみ「充実した無為」は必要なものなのです。

五輪柔道判定問題

シドニー五輪の柔道百キロ超級決勝で、日本の篠原選手への判定が誤審だったとして、その主審を務めたニュージーランドの審判に日本から抗議文や脅迫文が殺到したといえます。同氏は、そのためノイローゼになり、家族と共に自国を脱出したと報じられました。

私にも、この判定場面をスロービデオを見て、明らかに誤審であることが分かりました。専門の柔道家なら言わずもがなです。なのに、その実際場面でなぜ間違えたのでしょうか。テレビや新聞で、その原因を適切にコメントできた人は、私の知るかぎり、ありませんでした。

私は、これを見て、まさに人間の執らわれの本質をみる思いがしました。審判員は中立でなければなりません。しかし、人間である限り、あるいは、現代のように全ての行動基準が自分の「利益と嗜好」になっている限り、人は、その「執らわれ」によって行動が左右されるのです。それを避けることは、殆ど不可能なことです。その審判には、フランスのドレイ選手の攻撃しか見えていなかったのです。これは、陪審制の裁判でも同様です。相対なものの争いは、すべて、こうなっていくのです。

釈尊のことば（九五）

法句経解説

（三一六）恥じなくてもよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪（よこしま）な見解をいだいて、悪いところ（地獄）におもむく。

「恥じなくてもよいことを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々」とは、どんな人たちのことを言っているのでしょうか。少し分りにくいかもしれませんが、

私に言わせれば、現代人の大多数がこうなっているのではないのでしょうか。

「恥ずべきことを恥じない人」とは、厚顔無恥で、自己中心的な人のことを言っている、と多くの人が思われると思います。その通りですが、では、「恥じなくてもよいことを恥じる」というのは何のことなのかは、ご理解いかないかもしれません。

実は、こう言うには、「何を恥ずべきで、何を恥じなくてもよいのか」の基準が必要なのです。

また、現代では、そもそも恥じるとはどんなことなのか、問われているのだと思います。

かつて、日本人は恥ずかしがる人が多いと言われま

した。でも、今ののように、厚顔無恥に自己を主張することが、もつとも大切な徳目となっている民主主義社会にあつては、恥ずかしがることは、治療すべき精神的な病理とさえみなされています。

あの有名なアメリカの女性文化人類学者、ルース・ベネディクトは、『菊と刀』という書物の中で、日本の文化を「恥の文化」とし、西欧の文化を「罪の文化」としました。そして、西洋文化におけるように罪という内面的な自覚によつて善行をなす文化よりも、日本の文化を恥じという外面的な強制力によつて善行をなす、より低い文化と位置づけました。

この考え方を巡つてかつて多くの議論がなされましたが、現在の日本には、いづれにしても当てはまらなくなっています。日本には今、罪の文化もありませんし、恥の文化もありません。あえて言えば、「損得・選り好みの文化」があると言えるのでしょうか。善行は自分の得になるか、自分の好きなことに合っている時はするが、自分の損になつたり嫌いなことはしない。さらに消極的に「悪を為さない」のは、法律で処罰をされて、嫌な思いをするし、その結果、自分が損をしたり、得することを逃したりするから、ということなのです。そこに罪の意識も、恥の意識もありません。悪いことをして、マス

コミなどでたたかれれば、自分の収入が減つて損をするからしない。もつと悪く言えば、ばれないようにうまく、ずる賢く、わる賢く、するということ。政治家をはじめ、財界人、官僚、医師、教師、芸能人、スポーツ家、など社会のあらゆる部局、階層に、この傾向は行き渡つて、その例外はありません。

民主主義が行き過ぎている日本では、社会崩壊、アノミー（欲求の無規制状態）は、もう世界の不名誉レースのトップ（ランナー）に立っています。

話を日本の「恥の文化」に戻しますが、日本の恥の文化を低いとするベネディクトの主張には反論があつたように、とても興味をひきます。一度調べたいと思います。私も、かつての日本の恥の文化が、西洋の罪の文化に較べて低いとは思いません。逆に、日本の恥の文化の方が、より高い文化であると思います。

日本の文化は、元来は「こころの文化」です。お互いがこころを開いて、こころを通わせ合う社会でした。そこに仏教が伝来、仏教の教えが浸透しました。そこでは、互いが凡夫で、お互いに許して和すという、宥和の精神がますます定着していききました。教えに背くことやお互いの期待に反することをすることが、恥ずかしいことの根本なのです。偈はそのことを言っているのです。

後記

一、よく雨が降って、野菜が根腐れを起こすものまで出ています。我が畑の池も満水です。

二、雨の「お陰」で、雑草がよく伸びます。しょっちゅう、草刈りをしています。セイタカアワダチソウや名前を知らないのですが、黄色の花が咲き実が衣服にすぐひつつく草は、刈ってもまたそこから新たな芽が出てきて、何度でも刈らなければなりません。

三、十月十三日～十五日、東京大学で開かれた日本倫理学会に出席しました。現代の民主主義の欠陥とその克服の道をゼミ生だった小川敦君が発表してくれました。たくさんさんの質問がありました。日本、いな世界に「民主主義の欠陥」といった考えが、まったくないだけに、多くの人が、理解できなかつたようです。

四、学会の合間をみて、かねてから私にインタヴューしたいと言われていた方と「第一ホテル東京」という立派なホテルでお会いしました。その方は、『致知』という雑誌を発行されています。致知出版社の社長で編集長の藤尾秀昭さんで、他にその雑誌の編集部長の柳沢マリ子さん、および編集員の方、カメラマンの方、です。

五、そもそものご縁ですが、その雑誌で「父性と母性」の特集号を出すに当たって、私が『こころのとも』に書

きました父性と母性の言葉が目について、話を聞きたいということでした。そのきっかけは、イエローハットというカー用品のチェーン店の社長さんである鍵山秀三郎さんという方が『こころのとも』のコピーを出版社にもつてこられて、紹介して下さいたとのこと。どなたか分かりませんが、コピーして配って下さったようです。その雑誌は、特定の書店にしか置かれておらず、大多数は直接講読のようです。六万余りの読者があるとのことです。表紙には「生き方探究 人間学誌」とあります。

六、講読の仕方や私の記事が載りました十二月号の、その部分のコピーを、お送りします。お申し越し下さい。

月刊 こころのとも	平成十二年十一月八日
第十一卷 十一月号	〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島
(通巻 一三二一号)	鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（よしと）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

